

## 第 87 回 歴史リレー講座「聖徳太子と法隆寺」 西山 厚氏 (R3.12.19)

今年には 622 年に亡くなった聖徳太子の 1400 年ご遠忌にあたります。ご存じのように、法隆寺は五重塔がそびえる西院伽藍、夢殿を中心とする東院伽藍（太子が住んでいた斑鳩宮跡）、そして非公開の若草伽藍（初代法隆寺）の三つの伽藍から成り立っています。若草伽藍の内部には五重塔の心礎（心柱を支える石）が残っています。『日本書紀』によると、670 年 4 月 30 日に若草伽藍が全焼したとあります。原因は五重塔への落雷だと考えられています。場所を遷して法隆寺は再建されましたが、伽藍配置は南北に並ぶ四天王寺式から、塔と金堂が左右に並ぶ法隆寺式に変更されています。しかし、なぜ場所を変えたのか、なぜ伽藍配置を変更したのかについては、明確な理由が分かっていません。

1997 年、桜井市吉備にある溜め池から巨大な寺跡（吉備池廃寺）が発見されました。ここは百済大寺（<sup>くだらのおおでら</sup>天皇が初めて造った寺）の跡と考えられています。伽藍配置は法隆寺式ですが、若草伽藍が焼失するより前に建立（639 年）されています。再建された法隆寺も当然この配置を手本にしたはずです。したがって、法隆寺式伽藍配置は正しくは百済大寺式伽藍配置と呼ぶべきでしょう。

さて、法隆寺西院伽藍メインの建物、金堂内部の仏像を薬師如来坐像から紹介しましょう。その光背には「用明天皇が自らの病気平癒のため伽藍の建立を発願した」という銘文があります。ほどなく天皇は亡くなりましたが、推古天皇と聖徳太子が志を継いで 607 年に完成させました。ところが 643 年、蘇我入鹿の命を受けた巨勢徳太臣ら（<sup>こせのとくだのおみ</sup>）が斑鳩宮を焼き払い、太子一族は一人残らず自害に追い込まれます。そのわずか 2 年後、入鹿は中大兄皇子らによって殺されましたが、のちに巨勢徳太臣は罪滅ぼしの思いを込めたのか、法隆寺に多額の寄進をしています。若草伽藍金堂再建に使用された材木は 670 年の焼失前に伐採されたことが証明されていますので、もしかしたらこの支援金を活用したのかもしれない。

次に釈迦三尊像です。中央の釈迦如来像は聖徳太子を表わしており、その光背には「釈像の尺寸王身なるを造るべし」とあります。その通りだとすれば、座高から身長が推定できるので、太子の背丈は当時の成人としては高めの約 175cm ということになります。また、鎌倉時代に造られた阿弥陀如来像の台座には中国で出逢った達磨大師（<sup>えし</sup>）と慧思が描かれています。達磨が飢人に、慧思が聖徳太子となって生まれ変わり再会を果たした場所がここ王寺町（「片岡山飢人伝説」）というわけです。

西院伽藍の五重塔は奈良時代に完成。その初層には土製の人物像が並べられています。釈迦が亡くなったときの人々の悲しみと嘆きが見事に再現されており、一見の価値があります。そして、西院伽藍の東側には太子像を祀る聖霊院があります。500 年のご遠忌で作られた建物で、太子像の胎内には小さな観音菩薩像が納められています。すなわち、太子の言葉は観音菩薩の言葉ということになり両者は同一視されています。

東院伽藍に目を移すと、八角円堂の夢殿がひときわ目を引きます。行信という高僧が国家の全面的な後ろ盾を得て建立したものです。ここには未完成の法華義疏（<sup>ほっけぎしよ</sup>法華経の注釈書）をはじめ、太子を表わしたとされる救世観音像や絵画など太子ゆかりの資料が納められています。特に、全巻に渡って訂正部分が見られる法華義疏は太子の真筆で、太子の苦悩が読み取れる貴重な史料です。もともと岡本宮という太子の宮だった法起寺（<sup>ほうきじ</sup>）で太子は推古天皇に法華経を講じているので、法華義疏はそのための準備ノートだったのではないのでしょうか。太子は生誕地飛鳥の橘寺でも推古天皇に勝鬘経の講義を行っています。

仏教学者でもあった太子の口癖は「世間虚仮唯仏是真」（この世のことは偽りばかり 仏さまだけが真実だ）でした。実際、太子は仏教信仰を深めるにつれ、政治の世界からは身を引くことになります。

最後に、十七条憲法の中で私が最も心惹かれる部分が第十条の「人みな心あり 心おのおの執るところあり」「ともにこれ凡夫のみ」（人の考えは違って当たり前、結局はみんな普通の人間だ）で、座右の銘にしているほどです。このような素晴らしい言葉を私たちに残してくれた聖徳太子には感謝の言葉しかありません。